

秋 田 巡 検 （ 齊 藤 先 生 ）

7 月 1 4 ~ 1 6 日

7月14日早朝、山形県遊佐駅集合より始まったこの巡検は次のような経過をとった。

第1日目、14日、砂丘の土地利用と開発を見ることを目的に遊佐駅から吹浦駅までの遠々10km以上に渡る進軍の後、残雪のみえる鳥海山を見学し、その日のうちに秋田に向った。

二日目、15日、秋田大学のバスに便乗する形で、大潟村と男鹿半島を回り、大潟村においてはその営農についてお話を伺い、男鹿半島では自然景観に注目した。三日目、16日、秋田市内の見学と鳥瞰をして正午に解散した。

私は大潟村の営農をテーマとしたので、事前調査と現地での説明をもとにまとめたものを次に書くことにする。

大潟村は八郎潟の中央干拓地約15,700haに特例により設置された村で、ここにおける営農は、農業だけで採算のとれる日本の新しい純農村の型を示そうと意図するものである。そのために当初の計画は、1戸10haずつの圃場を与え、経営と機械の利用を6戸で共同にし、最も労力と時間の節約できる直播を $\frac{1}{2}$ 以上実施することが望ましいとされていた。作るものはすべて米である。

〔1〕 栽培様式 初年（S34年）は直播：手植：機械移植が約4：5：1の割合で作付された。

ところが酸化層が不十分だったこと、運悪く冷害に見舞われたこと等で発芽、発育不振がおこり、直播は特に失敗に終わった。元々手植に自信のある人が多いだけに、その後直播は急激に減り、S44年には前述の比が約0.5：8.5：1となる。しかしその後は機械の改良等によって機械移植が台頭し始め、S48年には0：5：5となり、収量も機械が手植より大きくなった。そして今年の作付は0：2：8となっている。当初の目的であった直播は全滅状態になり、今は実験農場で行われているのみである。オランダでは干陸してから10年、酸化層が厚くなるのを待って作付を始めるのが常識というから、ここにおいては大変焦りすぎたことをそもそも指摘する必要がある。しかしこれから土壌が安定すれば、直播に新たな希望がうまれるかもしれない。

〔2〕 作付内容 S46年、米の生産調整による稲作休耕の指示が出され、大規模米作経営をめざす大潟村にとっては大混乱がおこった。入植者数に変化が生じ、作付内容も稲作休耕地に飼料作物、麦、豆、野菜を転作という処置がとられた。そして今年、49年になって営農の基本方針は

水稲単作から田畑複合経営に変わる。1人当りの面積も5ha増え、当分の間は7.5haずつ稲と畑作物を半々に作付することになる。畑作においても機械が駆使されることになる。

(3年 坂井陽子)

那 須 野 巡 検 (浅 海 先 生)

3 月 7 ~ 9 日

3月7日、私達は、冬の寒さのまだ抜けぬ西那須野駅に降り立った。那須野巡検のはじまりだった。寒かったのは事実だが、期待していた雪のかけらさえ見られず、妙に乾いた感じだったのが印象に残っている。

はじめての土地というのは、大変興味深いものだが、それだけに不案内で、私達はバスを乗りこしたりして、巡検第1日目から失敗をしてしまった。しかし、バスの運転手さんが、目的地まで無料で乗せていってくれ、思いがけず、土地の人々の暖かさにもふれることができたような気がした。

その日は、那須野についての講義とスライドで終った。

私達の翌日からの観察課題は以下の項目についてだった。

1. 那須野盆地の地形面の識別
2. 各地形面の構成地質の露頭
3. 各地形面上の土地利用景観
4. ボーリング
5. 那須疏水その他の那須野の水利
6. 那須岳の火山地形

翌日は、バスとジープとで、冬枯れの那須野をフルにまわったという感じであった。

宿舎を出て、竜城公園のある小高い丘に登ると、金丸原台地、権限山丘陵、蛇尾川河道が一望に見わたせ、遠く那須の山々が白く横たわっていた。静かな風景だった。

バスとジープは、ここを起点とし、金丸原台地を抜け、まず高岩に着いた。ここで、ボーリングをし(やってみると、すぐ礫層にぶつかってしまった)、黒磯へ向った。

黒磯とその次に行った西岩崎では、ルートマップ作成のため、比高測定などを行なった。西岩崎は、那須疏水の取水地である。ここに来る途中、那須疏水の改修工事も見えてきたが、これが乏水性